502：601：603：604（気象学史；研究連絡会；広島測候所；広島市江波山気象館）

第8回気象学史研究会「明治創設期の測候所と気象学：期待と役割―旧測候所保存資料から探る」をオンライン開催

気象学史研究連絡会

第8回気象学史研究会を日本気象学会2020年度秋季大会（オンライン開催）会期中の10月29日（木）にオンライン（リアルタイム形式）で開催した．前回の第7回研究会の開催から2か月と間が無かったが，約90名と前回に続き多くの参加があった．

今回は「明治創設期の測候所と気象学：期待と役割―旧測候所保存資料から探る」と題して，秋季大会担当の関西支部に属する広島県に1879（明治12）年初めて県営として創設された広島県広島測候所（現・広島地方気象台）を対象事例として，各種資料に記録された当時の気象事業諸活動やそれらをめぐる人々の言説から，草創期の気象事業展開模索の中でその活動の方向性が形成されていく過程を議論した（第1図）．当時，気象学が如何なるものと考えられていたのか，気象事業や各地測候所に何が期待されたのか，実際にどのような活動が行われたのかを理解することは，今日に至る気象事業発展の歴史と方向性，さらにはその将来を展望するためにも重要である．

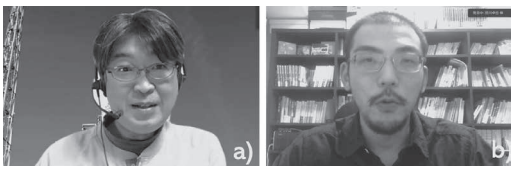
遠藤正智氏（広島市江波山気象館）は「広島市江波山気象館所蔵の気象学史的資料」と題して，広島地方気象台旧蔵資料の寄贈を受けた膨大な資料の一部を紹介した．江波山気象館の建物自体が被爆建物（旧広島地方気象台）でもある歴史資料であり，所蔵資料は1879年測候所設置当時の文書や1945年8月6日原爆投下時の当番日誌など多種多様である．歴史の証人である貴重な資料が現存することの重要性を強く印象付けた．

宮川卓也氏（広島修道大学）は，「草創期における気象観測所の役割と期待：広島測候所を事例に」と題して講演した．遠藤氏の紹介した江波山気象館所蔵の資料をもとに，測候所活動開始当初のその役割・機能を模索する過程において行われた，村々からの災害報告システムや日食観測で展開された啓発活動などを紹介し，気象事業の専門家・一般国民への受容過程の理解に重要な示唆が得られることを示した．観測データのみならず，数値化されない各種文書などの資料にも地域の知識・知恵が含まれており，地方測候所に関する資料保存の意義を強く訴えて話を結んだ．

地方における測候所事業の形成・発展・受容過程という，日本の気象学史でこれまで十分に取り上げられてこなかったテーマで，講演後には当時考えられていた地方測候所の目的・意義について活発に議論された．暴風警報という中央の目的に対して地方測候所は観測して中央に通報することが存在意義になるが，県令・藤井勉三（1840～1881）が内務省地理局の要請に応えて測候所設置を受け入れた意図として独自の目的があったはずであり，海運，農業，防災（広島は歴史的に水害が多い），衛生（コレラの大流行があった），軍事などが宮川氏や参加者からも指摘されたが，これまで見つけられた資料からは明確になっておらず，更なる調査が必要と宮川氏から説明された．

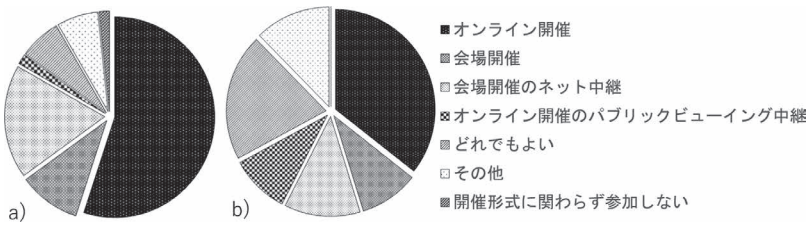
司会は研究連絡会世話人の財城真寿美（成蹊大学）が務めた．

今回は，初めてオンライン開催した前回第7回から間もなく，検討の時間が十分とれずに，ほぼ前回と同



第1図　第8回気象学史研究会（2020年10月29日）にて講演された遠藤正智氏（a）と宮川卓也氏（b）．ウェブ会議ツールZoomのオンライン画面．

© 2021　日本気象学会



第2図　第8回気象学史研究会アンケートにおける設問「今後の気象学史研究会で，あなたにとって最も望ましい開催形式をひとつ挙げてください」に対する参加された方（a），参加されなかった・できなかった方（b）からの回答の集計．アンケートは研究会参加申込者・気象学会メーリングリスト，気象学史メーリングリストで周知してウェブ上で行った．実施期間は2020年10月29日から11月7日まで，回答数は参加された方，参加されなかった・できなかった方それぞれ60，72である．「その他」は「ウェブでの録画公開」「わからない」など．

様の手順で運営を行った．アンケート等でいただいたご意見・ご提言や反省点は運営や進行に最大限反映させたものの，まだ多くの課題が残った．今回も参加された方，参加されなかった・できなかった方を対象にアンケートを実施し，多くの方からご回答をいただき，運営の参考とさせていただいている．ここでは，前回研究会について示したもの（気象学史研究連絡会ほか 2021）と同一設問に対する回答を第2図に示す．前回との間は2か月であるが，変化傾向は顕著である．オンライン開催を望む声が特に参加された方で大幅に増え，会場開催を望む声は前回よりさらに減った．このアンケートは無作為抽出ではないので，もちろん有意差検定はできないし，これを母集団の傾向変化とただちに判断することもできない．オンライン研究会への適応が進んだと見るか，会場開催を望む人が研究会参加を諦めてしまったと見るか，あるいは開催日時の違いによるのか（前回は土曜日午後，今回は平日夜），注意深く分析し，今後のあり方を検討していきたい．

最後にご講演いただいた遠藤氏・宮川氏，前回に続きボランティアとして運営にご協力くださった遠藤氏（ご講演に加え）・岸　誠之助氏（順不同）の各位に厚く御礼申し上げる．本研究会の開催にあたっては気象学会の研究連絡会等活動補助金の支給を受けた．

参　考　文　献

気象学史研究連絡会，遠藤正智，岸　誠之助，2021：第7回気象学史研究会〈「天気予報の自由化」25年―気象行政史の視点から〉をオンライン開催．天気，68，533-536.